

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十九卷 第二號

昭和九年八月一日發行

哀辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記事

田島博士逝く

故田島博士年譜及著書論文目錄

追憶文

織田 萬 神戸 正雄 山本美越乃
河田 嗣郎 本庄榮治郎 小島昌太郎 財部 靜治
汐見 三郎 黒正 巖 田島 順 大國 壽吉
谷口 吉彦 石川 興二

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

哀 辭

帝國學士院會員 京都帝國大學名譽教授 立命館大學名譽學長
田島錦治先生俄かに病を以て逝去せらる 嗚呼悲しい哉

先生は明治三十三年京都帝國大學法科大學教授に任ぜられ經濟學
第一講座を擔當せらる 實に京都帝國大學における最初の經濟學教
授たり 爾來法學部經濟學部を通じて教授の職に在ること二十有八
年 停年退職の後も猶講師として教壇に立たること年あり この
間先生の講義は經濟學上の諸學科に及ぶと雖經濟原論は終始一貫し
て之を擔當し晩年には更に東洋經濟學史をも講じてわが學部の一特
色をなすに至れり その蘊蓄を傾到せる講義がわが學部の聲價を高
むるに與つて力ありしはいふ迄もなき所なり

先生嘗て宮中の御講書始に召されて洋書を講ずるの光榮を荷はれ

後帝國學士院會員に列して學界の耆宿として仰がる 弓道漕艇其他
運動界に貢獻する所亦甚だ大なり 先生が學界運動界において後進
子弟を指導誘掖せらるる所の厚き人のよく知る所なり

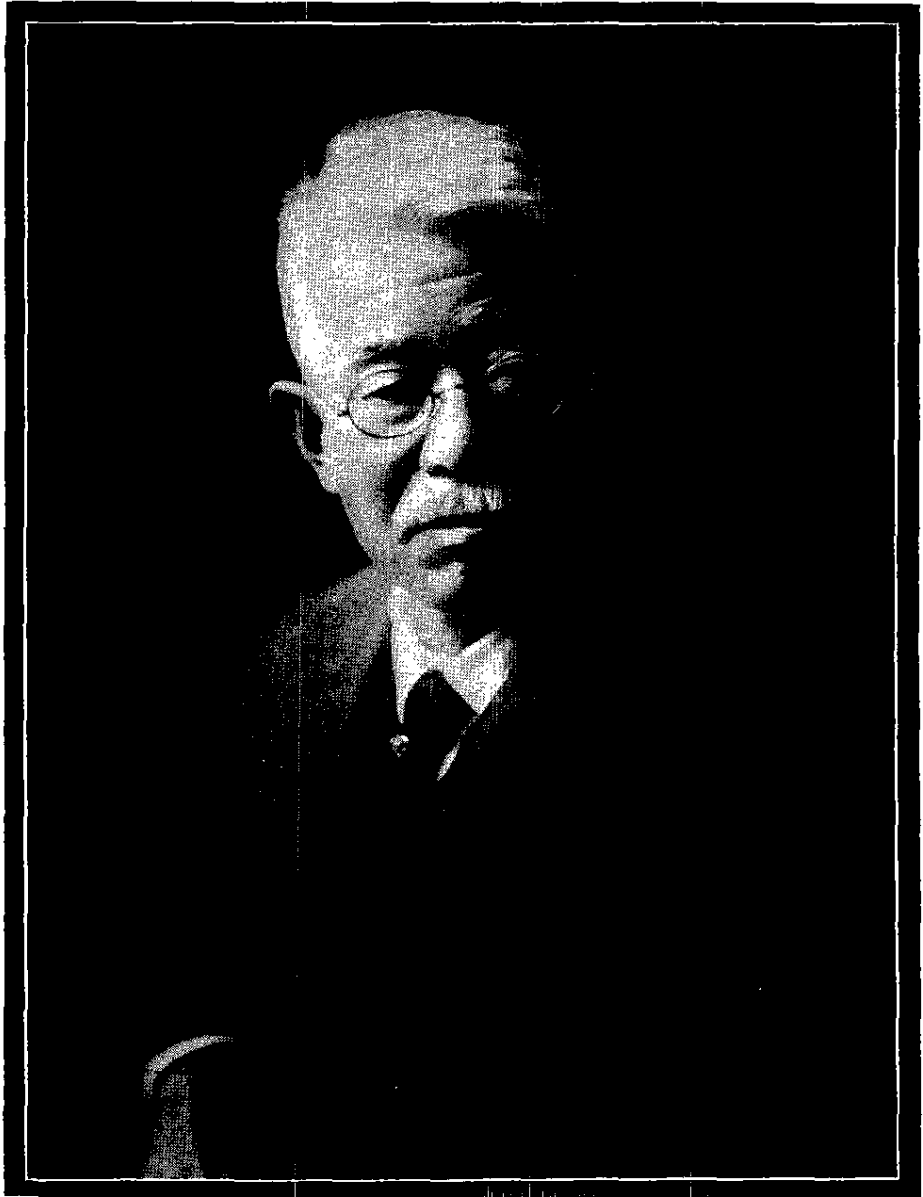
先生は久しくわが京都帝國大學經濟學會の評議員として會務に盡
瘁せらる 殊に本誌に寄せられたる幾多の研究は學界不朽の論説と
して珍重すべきもの多く爲に本誌の重きを加へたること幾何なるや
を知らず 本會の先生に負ふ所亦蓋尠少にあらざるなり

先生居常強健矍鑠として壯者を凌ぐものありしに六月二十七日突
如として病を獲られ翌日早曉俄に易簀せらる 痛恨何ぞ之に過ぎん
茲に謹みて先生の遺影を掲げ且哀辭を作り以て悼惜の誠意を表す

昭和九年七月

京都帝國大學經濟學會

田島錦治



田島先生の近影と署名

同	古	格	百	同	想	慮	感	護	今
く	帝	于	姓	く	加	書	想	に	文
、	毫	上	昭	、	道	を	の	益	尚
發	。 曰	下	明	發	德	讀	重	稷	書
語	。 放	。 克	。 協	の	思	ん	なる	を	は
の	勳	明	和	辭	想	て	四	合	堯
辭	。 欽	後	萬	て	に	第	條	し	典
あ	明	德	邦	あ	淵	一	を	居	の
了	之	。 以	。 黎	了	源	感	述	了	中
。 放	思	親	民	。 放	し	れ	ふ	。 以	に
勳	安	九	於	勳	且	事	る	下	三
は	々	族	時	は	一	こ	こ	盧	本
猶	允	。 九	難	支	致	と	と	書	典
ほ	恭	族	し	那	せ	す	す	を	を
大	克	既	と	上	る	。 支	。 讀	讀	合
勳	讓	睦	。 曰	古	。 照	郡	ん	ん	し
こ	。 光	。 平	若	の	で	上	て	て	、
い				經	あ	古	起	起	大
				濟	る	の	る	る	高
				思	。 扱	余	所	所	護
						の	の	の	無
						余	余	余	く
						の	の	の	、
						經	經	經	又
						濟	濟	濟	皋
						思	思	思	陶

昭和九年一月發行經濟論叢所掲論文原稿の一部



生先島田るけおに場々道弓學大國帝都京